

日本小児看護学会 第28回学術集会ご案内

学術集会テーマ：子ども、家族とともにある看護

【会期】2018年7月21日(土)～22日(日)
【会場】名古屋国際会議場(名古屋市熱田区)
【一般演題・テーマセッション募集期間】2018年1月10日(水)～2月14日(水)
【事前参加登録期間】2018年1月10日(水)～5月15日(火)
【参加費用】会員(事前)：10,000円、会員(当日)：12,000円 / 非会員(事前)：12,000円、非会員(当日)：14,000円
*非会員の参加費には消費税が含まれます。

【プログラム】

会長講演：「子どもと家族が主体であること、看護がともにあること（仮）」
奈良間 美保 (名古屋大学大学院医学系研究科 教授)
特別講演1：「ニャーゴのやさしさ・ティラノのおもいやり」
宮西 達也 (絵本作家)
特別講演2：「『修行と葛藤』-生きる知恵と力を高めるために」
内田樹 (武道家、倫理学者、思想家)
みんなで作るシンポジウム：テーマ「子ども、家族とともにある医療」
一般演題 (口演・示説)、テーマセッション (一般・理事会企画等)、学術集会企画等
【第28回学術集会 URL】<http://www.cs-oto.com/jschn28/>
【学術集会事務局】名古屋大学大学院医学系研究科看護学専攻
〒461-8673 名古屋市東区大幸南1-1-20 E-mail: jschn28@umin.ac.jp
【運営事務局】株式会社オフィス・テイクワン
〒451-0075 名古屋市西区康生通2-26 E-mail: jschn28@cs-oto.com
Tel: 052-508-8510 Fax: 052-508-8540

2017年度日本小児看護学会 地方会（四国地区）開催について

2017年度日本小児看護学会地方会(四国地区)を、2018年3月10日(土)13:00～16:00、四国大学において開催いたします。テーマは「育児を支える小児看護-様々な医療ニーズのある子どもへの支援-」で、教育講演とシンポジウムを計画しています。教育講演は「脳科学を活かした子育て」について、医師の立場でお話をさせていただきます。シンポジウムは「様々な生活場面における、医療ニーズを持つ子どもと家族への支援を考える」ことを目指して、小児病棟看護師、保育士、訪問看護師、養護教諭、発達支援の各専門職者の活動や提言をお聞きし、参加者と共に子どもへの支援について考えたいと思います。

終了後に交流集會を計画しています。子どもと家族への支援を実践しておられる小児病棟看護師、小児救急看護認定看護師、小児専門看護師、訪問看護師の方々、小児看護を専門とする大学教員等の活動をご紹介いただき、参加者と情報交換する場したいと思います。参加費は会員・看護学生は無料、非会員は1000円です。年度末のお忙しい時ですが、皆様のご参加を心よりお待ちしております。(詳細は四国大学ホームページをご参照ください)

学会誌論文のJ-stage公開

日本小児看護学会誌Vol.26(2017)の新規論文が7月31日にJ-STAGEにて公開されました。以下のURLより論文の閲覧とダウンロードが可能です。

今回は、Vol.27(2018)の新規論文として2018年3月に公開される予定です。

J-STAGE :
<https://www.jstage.jst.go.jp/browse/jschn/-char/ja/>

研究奨励賞を受賞して

● 西田 千夏 (宝塚大学)

この度、「発達支援を受けている子どもの親が子どもを洞察するプロセス-親の内省機能が及ぼす影響の検討-」と題した論文で研究奨励賞をいただきました。身に余る光栄であり、研究にご協力下さった皆様へ、心より感謝申し上げます。

私はこれまで、発達支援を受けている子どものご両親へインタビューを実施して参りました。その中で、内省を重ねて子育てへの意味を見いだされるご両親の姿を目にしました。“このプロセスの背後に何かあるのかを明らかにしたい。それが分かれば、わが子との関係に苦しむ両親の力になれるかもしれない”と考えたことが、今回の研究に取り組むきっかけでした。しかし、研究結果を論文で分かりやすく伝えることは、容易ではありませんでした。査読いただいたコメントへの答えが出せず頭を悩ませる日々が続きましたが、何度も書き直す過程で伝えたいことが整理でき、新たな気づきも得られました。

今後は、研究結果を、少しずつでも確実に還元して参ります。そして、これからも学会誌、学術集会で多くの研究・実践に触れさせていただきながら、小児看護の知見を広げたいと思っています。

◆ 会員の皆様へ ◆

ニュースレター51号をお届けいたします。次号52号よりメールマガジンにて配信いたします。尚、名誉会員にはこれまで通り郵送でお届けします。

ぜひ、この機会に登録手続きをしていただきますようお願い申し上げます。手続きは以下のQRコードまたはURLにアクセスして行ってください。http://jschn.umin.ac.jp/ml_add.php

なお、申請には会員ID(小児看護学会会員番号(10桁))、会員名、メールアドレスが必要となります。皆様の登録をお待ちしております。



広報委員会メンバー ●委員長：江本リナ ●委員：上別府圭子、西田みゆき、安田恵美子、吉野純、鶴巻香奈子

2017年12月 第51号

一般社団法人

日本小児看護学会

Japanese Society of Child Health Nursing

News Letter

日本小児看護学会 第27回学術集会を終えて

学術集会長 小城 智圭子
(京都府立大学法 京都府立医科大学附属病院)

平成29年8月19日(土)・20日(日)、京都市の国立京都国際会館に於いて「子どもたちの笑顔は 私たちの宝もの」のテーマで学術集会を開催いたしました。この学術集会は、久しぶりの臨床現場でその上小児専門病院ではなく大学病院からの大会長であったこともあり戸惑いや不慣れから、皆様方にはご心配をおかけしました。京都では初めての開催で、開催場所の決定に苦慮いたしました。アクセスが良く1000名以上の皆様が一同に集える場所など条件を考ながら副大会長の京都大学大学院鈴木真知子先生にご助言を頂きながら決定いたしました。また当日は猛暑であったにもかかわらず、事前・当日を合わせ1837名の方に参加いただき心より御礼申し上げます。大きな事故もなく無事終了いたしましたことに、参加者の皆様、理事会の先生方、企画委員・実行委員の先生方、ボランティアの方々並びに関係者の皆様のお陰と感謝いたします。

今学術集会では、特別講演として兵庫県立尼崎総合医療センター院長代行の平家俊男先生に「難病疾患説明・臨床応用開発に向けたips細胞研究の展開」のテーマで最新の医療についてご講演頂きました。免疫疾患と血液疾患の患者さんに由来するips細胞による病態解析から臨床における応用等までわかりやすくお話しして頂き最近の医療の進歩に驚きを隠せませんでした。また、京都府立医科大学大学院医学研究科小児科学教授の細井創先生には、教育講演として「Children First! 子どもたちが教えてくれる未来の医療と社会」のテーマで、チーム医療に裏付けされたトータルケアについてご講演頂きました。小児医療では、医師・看護師をはじめとする様々な職種との連携、つまり「チーム医療」が必須です。チームのそれぞれの職種が一体となり、子どもを取り巻く家族や環境に対しても働きかける包括的取り組み「トータルケア」が重要と内容に小児医療の原点を思い返すことができました。シンポジウムは、臨床ならではのテーマ「子どもたちの笑顔にするわざ」で、4名のシンポジストの皆様が子どもたちの笑顔を創り出すことができる関わり方を語り合っていました。アニマルセラピーとしてのファシリテッドの導入、物語を包摂するホスピタルアートの可能性、外来治療を受ける子どもたちへの対応、こわがらない検査を目

指した活動など、看護師以外の職種の方々を含め様々な視点からご講演して頂き参加者の皆様の職場で参考にさせていただける内容であったと考えております。

一昨年の第25回より公募されているテーマセッションは、今大会では27演題と多くの応募がありました。一般演題としては、口演92演題、示説120演題の計212演題にも上り小児看護の関係者の皆様の関心の高さがうかがえました。共催セミナーでは、びわこ学園医療福祉センターの施設長高野知行先生に「てんかんを有する児童・生徒の生活指導」を、ランチパフォーマンスでは、「親の会からの発信」もあり、テーマセッション・一般演題をはじめ多くの方々に参加して頂き皆様が積極的に意見交換されていました。

小児看護学会の学術集会には、応募の演題数や参加者数など年々多くなっています。学術集会主催側としては非常にありがたいことなのですが、選定等に苦慮する場面がありました。特に今大会の私のように学術集会開催等になっていない臨床系の場合は、周りの皆様に多大なご迷惑をおかけしてしまうことになります。皆様にご迷惑をおかけしない方策が見いだせるようまた小児看護学会及び学術集会をさらなる発展のための方策を御検討して頂けると幸いです。

次回第28回大会以降も今大会以上に盛会になることをお祈りしております。

▼第1会場にて



▲正面玄関にて



▲テーマセッションにて

理事長挨拶

● 一般財団法人小児日本看護学会 理事長 奈良間美保

日頃より、一般社団法人小児日本看護学会の活動にご理解、ご協力いただき誠にありがとうございます。

本学会は発足から26年目を迎えています。これまでの間、子どもの健康と幸せのために活動して参りました。時代とともに子どもと家族を取り巻く環境は著しく変化し、学会に求められる役割もより幅広く多種多様なものとなりました。社会からの要請に迅速に対応し、よりいっそう信頼される学会であるために、2013年には任意団体から一般社団法人小児日本看護学会へと組織改革にも取り組み、現在に至っております。

この度、2017年6月に開催されました社員総会で、新理事体制となりました。四半世紀におよぶ歴史に学びを得ながら、今後も役員一同一丸となって、本学会活動のさらなる発展に努めて参りたいと考えております。

本学会は設立当初から、小児看護の実践と教育・研究をともに大切にするという理念のもとに活動して参りました。今後も「学術・研究活動を推進すること」を通して、小児看護学の発展に寄与する学会でありたいと考えております。2017年度より、学会誌のオンライン公開システムを構築し、本誌に掲載されている論文を広く社会に発信する体制が整いました。また、併せて査読システムをオンライン化したことによる効率化も期待されておりますので、会員の方を対象とする本学会からの研究助成等をご活用いただき、独創性のある研究や実践への貢献度が高い報告等を多数ご投稿いただけましたら幸いです。

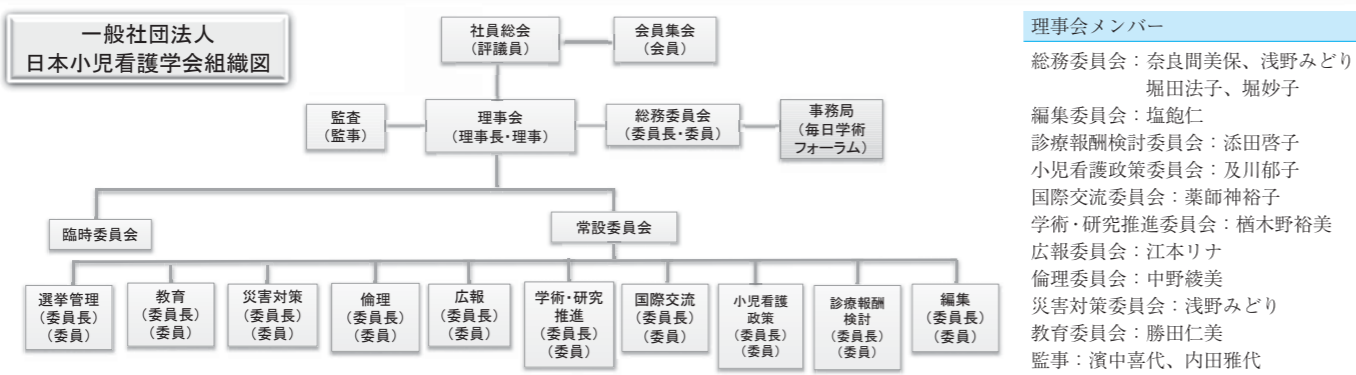
また、本学会の役割として「小児看護の実践の向上を図ること」も大変重要な役割の一つだと思います。学術集会や地方会、研修会等における教育活動、並びに学会ホームページに掲載されている子どもに関する倫理、育児支援、在宅療養、特別支援学校等に関する本学会の成果報告が、子どもと家族の看護のいっそうの充実につながることを心より願っております。これらの実践や教育・研究活動を国際的な活動に発展させることも本学会の課題の一つとして、今後の活動について検討して参ります。

さらに、社会への積極的な貢献という視点から関係機関との連携や調整を図り、学会としてのタイムリーな意見の表明、診療報酬改訂等への主体的な取り組み、災害への備えについて、小児看護の視点からの検討や災害発生時の迅速な対応を通して、「子どもや家族にとって有益な環境づくりに貢献すること」に努めて参ります。

本学会の方針や活動は、学会ホームページを通して会員並びに社会に向けて発信しております。2200名を超える会員の皆様並びにご支援者の皆様とともに、これからも子どもと家族にとって有意義な活動を探求し、継続して参りたいと思いますので、今後とも変わらぬご支援ご協力のほど宜しくお願い申し上げます。



奈良間先生



学術・研究推進委員会 活動報告

学術・研究推進委員会では、学術集会、研究助成や国際学術会議の発表助成、研究奨励賞や学術・研究に関する事業を推進する役割を担っています。活動内容をご紹介します。

【学術集会の開催に向けた取り組み】

学術集会は毎年1回開催されます。委員会では、学術集会会長、企画委員会と連携を図り、学術集会の企画運営をしています。2017年度の学術集会は、6年ぶりの臨床現場からの大会長として京都府立医科大学病院の小城智佳子看護部長のもとで、8月19・20日に京都で開催され、1800名を超える参加者があり大盛況に終了しました。現在、2018年度の学術集会に向けて、名古屋大学の奈良間美保大会長はじめ企画委員の先生方が、新しい企画を盛り込んで精力的に準備を進めておられます。「子ども、家族とともにある看護」について学びを深める学会になるよう、委員会として力を尽くしていきたいと思っております。

平成30年7月21・22日、学術集会には是非ご参加ください。

【研究助成や国際学術会議発表助成への取り組み】

小児看護学会では、子どもたちの健康増進に寄与するため小児看護の実践・教育に関する調査・研究に対する研究助成、また、研究成果の国際学術会議での発表や、世界の小児看護実践者・教育者と交流し学会員が見聞を広めるための国際発表助成を行い、わが国における小

- 委員長：楢木野裕美
- 委員：内正子・泊祐子・小野智美・中谷扶美・長田暁子・岡崎裕子

児看護の発展を図ることを目指しています。国際学術会議研究発表助成は名誉会員川出富貴子先生のご寄付によるものです。2016年度の研究助成2件、国際学術会議研究発表助成1件が学術集会でその研究成果の発表がありました。学会HPのご案内、学術集会で助成募集のご案内・チラシを配布いたしました。残念ながら現在までに2018年度の助成に向けた応募はありません。会員の皆様、日々の看護実践から研究への取り組みをなされているのではないのでしょうか。委員会では研究助成という形でサポートをしていきたいと考えていますので、気軽にお問い合わせください。

【研究奨励賞への取り組み】

研究奨励賞制度は、前年度に小児看護学会誌掲載の論文の中から研究奨励賞を選出し、その執筆者を会員集会で表彰するもので、2016年度は、西田千夏さん(日本小児看護学会誌、24巻2号に掲載)が表彰されました。委員会では研究奨励賞候補論文を選出しています。この制度を通して小児看護の実践、研究活動の発展に寄与していきたいと思っております。

さらに小児医療・小児看護が抱える課題を見据え、学会員のニーズに合わせて本学会の学術・研究推進に向けて委員会として取り組み、学会が社会貢献できるように活動を進めていきたいと思っております。



「リレートーク」 田代 弘子さん

自己紹介

小児専門病院で約30年間小児看護に携わってきました。定年後、埼玉県東から西に2時間かけて通勤しています。職場では3つの顔で働いています。小児アレルギー科と小児発達障害の専門外来の看護師、大学保健室の看護師、保育所の看護師の3つの顔です。さらに、埼玉県小児救急電話相談(#8000)の相談員でもあり、日本医療保育学会の事務局員でもあり、99歳の父の介護をする娘で、自宅では韓国時代劇ドラマに夢中になって何もしない妻です。

看護師になったきっかけ

小学校6年生の時に見たこともニュースがきっかけです。看護婦が不足しているが、秋田から看護婦が島田療育園に集団就職し、「おばこ天使」と言われたというニュースでした。人手が足りないなら、私でも役に立つかもしれないと思ったのが、看護師になってみようかと思った始まりでした。

新人時代の思い出

とにかくトイ看護師でした。自分が受け持っていた患者が急変した時に、先輩たちが蘇生をきばきとしていたのですが、わたくしは全く手が出せません。それでも生理食塩水のアンプルを切ることならできると思ったのですが、手が滑ってアンプルを割ってしまいました。当直婦長に、「あなたはそこで見学していないさ。」と言われました。

小児看護の魅力

30年間を振り返ると、子どもの遊びや発達を支援できないことに悩んだ10年間、子どもの権利を保障するために技術や理論を模索した10年間、子どもの権利を伝えるために10年間でした。子どもを看護していて、どんな重症の時でも希望が持てること、成長の瞬間に立ち会えることが楽しかったです。

呼吸不全で、何度も再挿管を繰り返していた子どもが回復してきたときに、散髪した私に「ありがとう」と言ってくれた時の嬉しかったこ

とはよく覚えています。お礼を言われたことより、言葉を取り戻したことに感動しました。「あんなに重症だったのに、ここまで回復するとは!」と感動し、そのことが重症な子どもを看護するときの希望ともなりました。

外来で、プレバレーションをしてから採血した後に、子どもたちのドヤ顔を何度も見ました。「採血で頑張った人は誰?」と聞くと、針を刺した時はちょっと泣いちゃったけど、処置室にいる大人たちがみんな拍手して自分を褒めてくれるのは自分が頑張ったからだとかわり、お母さんの背中にちょっと隠れて、ドヤ顔をしながらそっと手を挙げる。そんな子どもを見て、子どもの権利を保障することは子どもの力を引き出すことであり、子どもの成長の瞬間に立ち会っていることを実感し、それが楽しいのです。

ストレス解消法

通勤途中に、街や駅のエキナカでお買い物をするのがストレス解消法です。定年前はコンビニショッピングしかできなかったのですが、若者向けやおばさん向けのおしゃれで安い買い物を楽しんでいます。ふだんの日曜日はヘルパーさんが来ない日なので、父の介護を私がしているのですが、月1回は日曜日にもヘルパーさんに来ていただき、小旅行や秋のハゼ釣りを楽しんでいます。(写真は21cmのハゼを釣った得意顔です。)

後輩達に期待すること

子どもの権利を保障する理論と技術を高めて、治療を受ける子どもが自ら立ち向かう力を引き出してほしいと思います。成長の瞬間に立ち会いながら、子どもの看護を楽しんでほしいと思います。

バトンを受けて欲しい人 🐦 朝野春美さん



田代弘子さん

診療報酬検討委員会 活動報告

- 委員長：添田啓子
- 委員：日沼千尋・西田志穂・古谷佳由理・梶原厚子・萩原綾子・櫻井育穂

診療報酬検討委員会は、2年ごとに行われる診療報酬改定に向けて要望書の作成や調査活動を行います。これは、小児看護および小児医療に関して診療報酬等の経済的保障の面から、現状を改善していく提案をするために行っている活動です。また、学会会員への診療報酬に関する情報提供と啓発活動を行っています。平成29年度は、添田啓子、日沼千尋、西田志穂、古谷佳由理、梶原厚子、萩原綾子、櫻井育穂の7名で活動しております。

以下に、平成29年度の活動を紹介します。

1. 診療報酬改定に向けた要望書の作成

H30年度 診療報酬改定に関する要望書ができ、看保連から厚生労働省に提出されました。提出項目21件のうち、5件に小児看護学会からの要望案が採用されました。以下が小児看護学会から提出した要望です。

重点項目 I

- 1) 在宅・小児在宅ケアコーディネーター（看護師）によるケア計画立案への評価
- 2) 小児を対象とした「退院支援加算1」の施設基準に含まれる「介護支援連携指導員の算定実績」の削除

重点項目 II

- 1) 要支援児対応に関する専門チームへの評価
- 2) 専門性の高い看護師による小児慢性特定疾患患者等

への外来看護相談に対する評価

- 3) 「がん患者指導管理料1・2」の算定要件に小児看護専門看護師の追加

要望提出後、上記のうちI-1)2)、II-2)の3件について、厚労省からの問い合わせが来ました。小児看護専門看護師の方々や、在宅・小児在宅ケアコーディネーターの研修を主催されている奈良間先生にご協力をいただき、実績や研究報告を提出しました。厚労省からは、看護の実績や成果についてエビデンスとなる資料を求められています。

日本小児看護学会会員の皆様には、診療報酬改定の根拠となるよう、看護実践や調査・研究を積み重ね、成果を論文として残していただくようお願いいたします。

2. 診療報酬についての情報提供・啓発活動

学術集会時に、テーマセッションを行っています。第27回日本小児看護学会学術集会では、「子どもの入院環境を守る診療報酬について考えよう-小児病棟に入院したらお金はいくらかかるのか-」をテーマにテーマセッションを行い、多くの参加者から好評をいただきました。



テーマセッションの様子 (診療報酬検討委員会委員長 添田啓子)